

山と博物館

第31巻 第1号

1986年1月25日

大町山岳博物館

合津真治君の彫刻展示

大町山岳博物館の中央ホールに、合津真治君（大町市六九町、勸氏長男）の木彫刻、「星Ⅰ」「星Ⅱ」「丹塵」「母像」の大作四点を展示した。

この博物館のホールは、設計段階から何点かの彫刻を配置するようになっていたのだが、ホールにふさわしい、芸術性豊かな作品がないまま今日に及んでいたのである。今回、本人とご家族のご賛同が得られたのである。配置してみて、彫刻を置く設計になつてゐることを、いままらながら知つたのである。

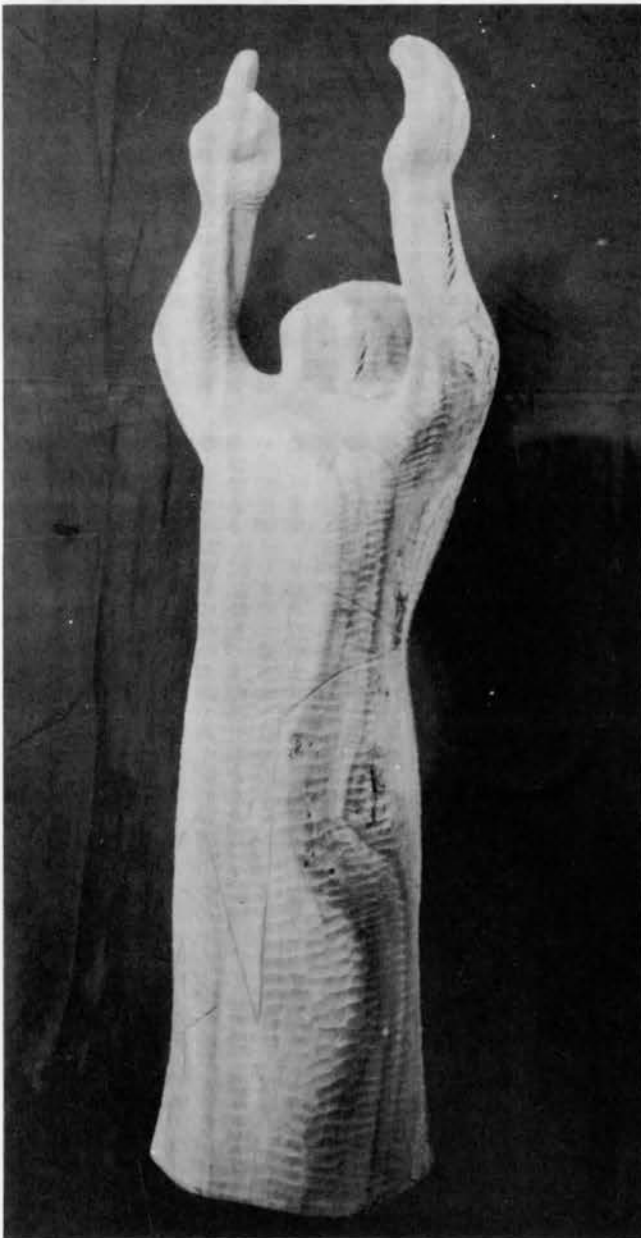
私が合津君を知つたのは十年ほど前だつたと思う。東京都美術館で開催中の二紀会展であつた。トルソー（女の胸だけの塑像）で受賞してゐた。拙宅に近いので後日聞くと、初出品での受賞とのこと、並々ならぬ才能の持ち主だと思つた。翌年も受賞、同展の選抜展に出品するなど評価は高く、数年で同人（無鑑査）になつた。

本来なら、無鑑査出品できる会員とか、同人は、芸術家として生きる絶対な地位なのだが、彼はまもなく二紀会を辞し、無所属となり、個展などで勝負している。個展は、東京の村松画廊、ときわ画廊などが多いが、中央新聞がその都度取り上げるのだから、新進彫刻家として注目されていることがよくわかる。

東京、福生市駅前広場に建つ象徴的モニメントは、彼の力作である。

彼の彫刻家への変つた歴史にふれておきたい。大町二中→深志高校→早稲田大学（政経）卒、同大学文学部へ再入学したが中退。彫刻は小島宏志氏に師事。彫刻のメッカ、イタリアでも修業する。最近ではインドの聖河、ガンジスの流れと、人とのかわりを追求している「恒河シリーズ」に注力している。夫人は洋画家。東京、福生市に居住。

（一水会会員 石沢 清）



星Ⅰ 合津真治 作

長野時代の志村烏嶺

峯村 隆



志村烏嶺翁

はじめに

昨春秋、志村烏嶺氏の関係資料4点が、東京都三鷹市にお住まいのご子息志村清美氏より山岳博物館へ寄贈されたことは、先月号でお知らせしたとおりである。このたび整理を終え、氏の著書『千山萬岳』に寄せられたウエストン直筆の序文と、日本山岳会の機関誌『山岳』初期号5部を展示したことを契機に、長野在住時代を中心として寄贈資料にうかがえる氏の活動に触れようと思う。

志村烏嶺氏のこと

氏は明治7年、栃木県那須郡烏山町に生まれた。本名は寛、烏嶺は故郷烏山に因んでの号である。

氏の祖父は菊や松の栽培に熱中していたようで、氏もその血を受け継いでか、幼少からラン等を探集してきては栽培を楽しんだという。氏にこの頃芽生えた植物への興味は終生途絶えることはなかった。

明治25年、栃木師範に入学し、29年同校卒業、栃木県上都賀郡西方小学校の訓導として教職に就く。明治31年には師範学校、中学校等の地誌、地文、動物、植物等各教科の教員

資格を檢定にて取得したという。こうして栃木県立第一中学、第二中学、茨城師範、仙台第一中学など各校で教鞭をとり、明治36年11月より長野中学へ赴任する。

長野以前の植物研究に関しては、茨城師範時代の野州一帯の植物採集、仙台一中時代の海岸植物研究等が寄贈資料中に僅かに散見するのみで詳しい活動はわからない。だが後の高山植物と白馬との結びつきから察すれば、任地の先々で好適な題材とフィールドを選んで研究に励んだことだろう。

また、茨城師範時代に町の営業写真家と親しくなり写真術を習得し、以降写真に興味とするようになったというが、植物研究とともにこの写真の趣味は、長野時代、氏にとつて大きな意味をもつことになる。

大正5年5月、12年余りの長野時代を終え台湾へ渡り、台中の中学校へ赴任。大正11年5月、帰国後永年の教職を辞す。

以後昭和36年に亡くなられるまで、足腰の丈夫なうちは採集に各地を歩き、晩年は園芸、標本整理と、余生を植物に打込まれた。

- *1 伊藤半、志村烏嶺(下)、(日本山岳会会報Vol.100)
- *2 同、同、(上)、(同、Vol.101)
- *3 岩村小一郎、志村烏嶺のこと、(復刊、やま、出版局)

長野時代のはじまり

「私が最初に山へ登ったのは、明治三十七年なんです。元来、私は勝負事というのがきらいでしてね、田舎では何の楽しみもない、弱っているところへ、三好(学)博士が独逸から帰ってきて、高山植物の分布について語ってくれたわけですよ。よしというので高山植物をやることにきめたんです。」

氏の「日本山岳会創立前後の見聞」(以下「見聞」と略す)によれば、明治37年春、雪

融けを待つて休日ごとに飯綱、戸隠の山々へ登り、高山植物の生品の採集、培養を始め、暑中休暇までに70種ほど集めることができたという。続く7月には浅間山、八ヶ岳を訪れ、そして8月、白馬岳と出会った。

氏は「理科大学矢部吉禎氏の白馬植物目録を、日本植物学会の植物雑誌でみて、植物の豊富である」ことを知って白馬に向かったという。だがそれがいかなる山かは知らなかった。「見聞」には長野市を徒歩にて発し、柳沢峠に立つて初めて白馬を目の当りにした時のことが「代赭色の断崖、谷を埋めた残雪、夕陽に輝く峰頭、実に荘厳を極めた雄姿に、突如頰衝をガーンと殴られたような気がした。那須、日光、浅間、八ヶ岳等かつて登山した山々とは全く桁違いの代物であった」とある。白馬の山容にこの感動を覚えた氏は、いよいよ登山にかかると、加えて高山植物の素晴らしさに心打たれる。氏の共著「やま」の葱平の御花畑の光景、その美その麗、何物かよく比すべきものぞ。この天の楽園に迫進する吾は、心すずに神、身はこれ仙。」



氏の撮影した白馬の雪渓

初登山で氏は白馬に完全に魅了され尽くした。それは多くの氏の言葉を列記せずとも、この後、渡台まで毎年訪れている事実が証明するところである。

長野時代のはじまりは白馬を中心とする山と高山植物との関りのはじまりの時であった。氏の岳人としてののはじまりの時であった。

尚、この山行で、後にヒメウメバチソウ、シロウマオウギと名づけられた植物の新種を発見し、また茨城師範時代からの腕をいかして2ダースほどの写真も撮影している。

山岳会の胎動と氏

山岳会は明治38年、ウエストンの助言を大きな契機として、小島烏水、高頭式、城数馬それに日本博物学同志会の武田久吉、高野鷹藏、梅沢親光、河田黙の諸氏を発起人として誕生した我国初の本格的な山岳団体である。

氏と山岳会創設に関与する人々との結びつきには、植物研究と山岳写真という氏の登山の目的に呼応して2通りの道筋があったようである。寄贈された氏の肉筆のメモノートに詳しい箇所があるので、これを軸に推察したい。(引用文の句読点、()内注釈は筆者)

まず植物研究関連では城数馬氏との関りに始まる。初対面についての記述にはこうある。

「自分は白馬に登山以前から飯綱、戸隠方面の高山植物の栽培を相当にやつて居た。東京方面では高山植物の栽培が盛んになって来て居たから、毎号(前田曙山主宰の)園藝雑誌に記載した高山植物の記述が相当反響して、前田氏を通じ或は直接に寄贈分譲等を申込む人も多く、植物標本の交換は九州四国方面の人にもいくらかありました。」

此当時、長野の宅居の隣家に長野地方裁判所の小田判事が居ったので、城数馬が同氏方を尋ねた際に早速来訪され、爾来高山植物や写真を数えず寄贈して居った。

「此当時」がいつだったかについては、後で述べる高頭氏と氏との初対面が38年4月、



メモノートの一部分

高頭氏と城氏の初顔合わせが38年夏の氏を含めた三者会談であることを考慮すれば、明治37年中の夏以降ではないかと思う。

引用文にみる限り、城氏は園芸雑誌を見て氏を知り、前田氏を介して氏を訪れたと考えられる。だが五百城文哉画伯を中心とする人脈も見逃せない。別の箇所には、氏は茨城師範在任中、五百城氏と植物標本の寄贈が縁で知り合ったこと、五百城氏と城氏は相当懇意であったこと、武田氏は五百城氏を訪ねた際、城氏を初めて知ったことなどの記述がみられ、交流図も示されている。恐らく氏は城氏を通じて武田氏をはじめ日本博物学同志会の面々を知るに至ったのであろう。

一方写真関連では、同じ園芸雑誌に高山植物の記事とともに載せた第一回白馬登山の際の写真が契機となる。メモノート及び「見聞」を総合すると、まずこれに注目したのがウエストンで、その入手方法を小島氏に照会した。そこで小島氏は前田氏を通じて氏の了解をとり、上京していた高頭氏が小島氏の依頼を受

けて新潟へ帰国途中氏を訪れたのである。明治38年4月のことという。

この時、氏は各々に数葉の写真を贈っていたが、ウエストンへ贈った蕨草から杓子を撮った一葉は「アルパインジャーナル」第23巻に登載され、日本アルプスの写真が海外の雑誌に載った最初となり、また小島氏は「日本山水論」に、高頭氏は「日本山嶽志」にそれぞれ登載している。

メモノートにはこうした機縁で急速に人々が結集する一過程も記されている。例えば、明治38年の夏、高頭氏の運営資金の負担の申し出に、高頭氏の人物を疑った城氏が身元調査にかけようとするのを氏が制して、長野で三者会談に及んだこと、会談中、最初は原稿が集まらぬから山岳会を日本博物学同志会の支会として発足するという案に、氏は「自分獨りでも雑誌の半分位は受持つと壮語し」どこまでも反対したが容れられなかった、といったエピソードである。

山岳会は明治39年4月、機関誌「山岳」第一年第一号を発行して公の発足をみる。この記念すべき創刊号の巻頭を飾ったのは、氏の白馬大雪渓の写真だった。

*6 明治33年、東京府立第一中学校に発足した昆虫を中心とした博物学の同好会組織。明治38年当時、既に会誌「博物之友」を編み、アカデミックな野外研究に取組んでいた。

長野時代の山行と著書

12年余りの長野中学時代は氏にとって山と最も関り深い時だった。

前章にみたように、初めての白馬に魅せられた氏は、時に豪雨に登山を断念し、時に天候不順の元凶と見なされ地元村民の反対に難儀しながらも、渡台まで毎年この山を訪れている。以下白馬以外の主な山歴を記す。

明治39年 針の木越え立山 中房・大天井 經由の槍ヶ岳

明治40年 中房・東沢・濁を経て鷲羽岳に至る「日本アルプス縦走」 奥羽周遊

明治41年 御嶽・駒ヶ岳 早池峯・鳥海山

明治44年 乗鞍岳

思惑を覆す山岳会の隆盛とともに、氏の山行も精神的になったことがうかがえる。当時、登山自体、今日では思いもよらない困難の連続だったに違いないが、その上に、氏は植物採集と写真撮影の苦勞を背負って登ったのだ。

例えば、写真機材は暗箱、乾板だけでも7〜8キロと相当の重量のため、専門の荷担ぎを一人余計に雇わねばならなかった。賃金は50銭、米1升10銭ほどの時代であるからかなりの出費だったことがわかる。また、露出だけで20〜30分、1枚撮るのに1時間、1日に6枚がやっととなる荷担ぎの人々も嫌がり、一緒に行く友人もなかったという。

明治40年、主に明治39年までの登山記で構成された前田氏との共著「やま」を刊行した。ハンドブックとしての携帯を配慮した日記帳のようなホックどめの装丁は奇抜だった。また明治42年には本邦初の山岳写真集といわれる「山岳美観」二集と「高山植物採集及培養法」を出している。後述の「千山萬岳」も含めて、氏の著作は自らの高山幽谷に対する感動と経験を広く里人に伝え、登山意欲を盛りあげた。それは氏の出版のひとつの目的でもあったろう。だが氏の思いを遥かに越えて、登山の大衆化は急テンポだったようである。

自らの新聞連載記事が中心のスクラップブック「鳥嶺文集」の大正4年の記事「日本アルプス 蓮華の大池(一)」で、蕨草を下る学習院の生徒の「現代劇の舞台へでも出る様な」格好を見て歎いた次の一節には、氏の心情がよく現われている。

「自分が始めて登山した頃は麓の林も頂上の草原も全く太古のまゝの自然であつたが此御山も近年は非常に俗になつた」と自分の云ふ言葉の終らぬ内に、人夫は「旦那俗だの何のと云つても我等は一人でも登山者が殖えて一貫でも餘計な酒銭が取れ、ばよい、オー始めて此御山へ来た頃は、仙人の様であつた御前達も、情ない根性になつたものだ、ツク」

此山も嫌になつた、年々暑中休暇には、

おわりに

台湾から帰国後、氏は北アルプスへは一步も足を踏み入れなかった。その氏が、車窓から見た後立山連峰に矢も楯もたまらなくなり、昭和31年、ご家族に無断で41年ぶりに白馬に登っている。83才にして13回目、最後の白馬であった。既に資料として山岳博物館で保管している数点の写真や著書は、当時米館されて博物館の活動を激励下さり、後日お送り下さった品々であることを付記する。

(山岳博物館職員)



著書三冊

帰省でもする様な気持ちで登山したが、来年からは登るまい。」

大正2年の著書「千山萬岳」は明治40年以降の紀行と研究論文で構成され、例の写真が奇縁となってウエストンが序文を寄せている。山々に対する高らかな賛美と驚嘆に満ちた本書は、氏にとってはもはや帰らぬ昔日の記念碑だったのかもしれない。

*7 *4に同じ

エンコ・ツクベル・ネマル

—北アルプス東麓の方言(1)—

福沢武一

1 スワル(坐る)の南北安曇方言をひとわたりする。

- エンコスル 全域
- エントスル 全域的(除、北小谷・松川・池田・七貴・梓川・奈川・大野川)
- エントコスル 南小谷・大町・八坂・七貴・広津・南安曇(除、西部)
- エンチヨスル 全域的(除、北小谷・北城・神城・南安曇西部)
- エンチャスル 八坂・池田・会染・広津・南安曇(除、西部)

これらは児童語である。筆頭のエンコは俗語と呼ばれ、今では共通語に昇格している。

幼児が、尻をつけ足を投げ出してすわるのをエンコスルと言うが、これは、もしかしたら「猿猴」から来たのではないかと、つねづね私は考えていた。猿のことをエンコという地方もあるようだから、幼児のすわり方が猿のすわっている様子を連想させるのではないかと想像したのである。(「下水内の方言」岩淵悦太郎氏序)

あらぬところへ行っている。しかも「語源のたのしみ」五巻本の著者の発言だからたまらない。

長時間の正座は子供にはむずかしい。しかし、エンコの語義は「正座」である。エンは「艶」で、いかにも上品なさま。エントは「艶と」(お上品に)の意。エンチヨ・エンチャはエントのなまり。エンコ・エントコのコは、何々するコト(事)の略。

エンコは端正に坐り、身動きもしないこと

だった。さればこそ、故障した乗物にびたりだ。押しても引いても微動だもしないのだ。

以上のことを保証するものがある。

- チャンシル 全域
- チャンコシル 全域的(除、北小谷・奈川・大野川)
- チャンはチャント(きちんと、端正に)のチャンだ。チャンコのコは、エンコのコ。
- チャン(幼児語、正座)静岡・名古屋・出雲・愛媛(以下、日本語大辞典)
- チャンコ(同)上伊那・静岡・鳥取・島根

2 これらは安曇方言でもあることを忘れないでほしい。

- 次は少々古い用語である。
- オツクバイスル 全域的(稀薄)
- オツクベスル 全域

オツンベコスル 北城・神城・松川・会染・七貴・南安曇(西部稀薄)

これらも児童語で、次のものに由来する。

- ツクパウ 北小谷・美麻
- ツクバル 北安曇(北部・中部)・穂高
- 豊科・小室・奈川・大野川
- ツクベル 全域(除、北小谷)

この原義・原形は次のようである。

- ツクパウ(蹲)「突き這う」の意。(一)よつんばいになる。(二)平伏する。平身低頭する。(日本国語大辞典による)

これは最高にかしまった坐り方だ。両手を突き、額を地面にすりつけている。ここから導かれるツクバル・ツクベルが正座することとは当然だ。

ツクパウは伝統的な日本語で、ツクボウ・ツクバルの形で全国的に分布している。ツクベルは長野県に特徴的。その児童語がオツクベスル。これがオツンベコスルとなった。あどけない限りだ。

3 も一つ特殊な方言が拾われる。

- ネマル (一)坐る。北小谷・中土・南小谷
- ・平・八坂・有明・明科 (二)寝る。美麻・八坂・池田・大野川

ここで芭蕉句の一語に対面しようとは思わなかった。「奥の細道」の途上である。涼しさをわが宿にしておまるとなり。芭蕉このネマルは定見に達していない。説を大別すると、(一)寝る。(二)安坐する。(三)正座する。

参考に方言分布を見ると、

- ネマル (一)坐る。青森・岩手・宮城・島根・鹿嶋
- 根城川 (二)寝る。長崎千々石・鹿児島
- 肝属 (三)腐敗する。九州・喜界島(全国方言辞典による)

芭蕉句は、山形県下の産だったし、「正座する」の可能性が高い。わが安曇の場合は、東北・北陸の路線の余波だ。それが形の似た「寝る」の方へ流れかけている。

九州のネマル(寝る)はもともとのもので、東北系と鋭く対立している。古代に二つに分裂した。どっちがより原義だったか？

次のように別語を語源に立てる説もある。ネマル(ネバル(粘))の意。地につく意から(名言通・新村氏 国語学義録)。(上田女子短大教授)

博物館だより

資料寄贈ありがとうございました

- ビックケル他5点 大町市社松崎 高橋鴻生
- ビックケル 1点 大町市常盤上一 丸山隆士
- リュックサク他5点 越谷市恩間 林武夫
- リュックサク 1点

東京都板橋区赤塚新町 北原正宣
キスリングザツク 1点

山と博物館第31巻第1号

一九八六年一月二十五日発行
発行所 長野県大町市 TEL220-211
印刷所 大町山岳博物館
定価 年額1,200円(送料共)切手不可
郵便振替口座番号 長野四二二二九九三

